

入選 大分県 二宮 基陽 様 (40 代)

私は 20 歳になる前日に市役所に行き、国民年金の加入の手続をしたことを鮮明に覚えている。当時の私は大学生で、県外で一人暮らしをしていた。地元へ帰省した時に、祖父母から「年金は将来自分に返ってくるのだから何があっても絶対に加入して、自分で納付しておくように」と言われていた。周りの友人に年金手続のことを聞いてみると「していない」「親がしているのでは」「知らない」等の意見が多かったが、私は迷わずに年金加入の手続をした。なぜなら私にとって年金は大事なものだからだ。そのことを友人に話すと「将来、年金がもらえるかどうか分からないのに、よく手続するよな」「お金がもっていないよ」などと言われたのを覚えている。

小さい頃から同居していた私には秘密があった。祖父母が両親には内緒でこっそりとお小遣いをくれていたことだ。不思議と私のお財布のお金がなくなる寸前に、祖父母は私を「おいで」と手招きして、自分たちの部屋に呼んでくれた。そして、昔から使っている机の引き出しから金色の小判のキーホルダーのついた古い大きな財布から「大事に使いなさいよ」と 500 円硬貨や 100 円硬貨を握らせてくれた。その握らせてくれた硬貨の温かさを覚えている。

我が家は代々みかん農家だ。みかんからの農業収入は冬の時期に限られており、その年によって豊作不作もあり不安定な収入でもあり、不安定な農業収入よりも、祖父母の収入の柱は年金だったはずだ。そんなには多くなかった貴重な年金から、孫である私にくれていたのだ。だからこそ、小さい頃から祖父母は「年金は大事だ」「お金は大事に使いなさい」「年金の支払は自分でしなさい」と私に言っていたのだろう。それが私の中でイズムとなって残っている。

市役所で年金手続をして、その時に表紙がオレンジ色の年金手帳をもらった。手帳をもらった時に、何となくだが世間に認められて、大人の仲間入りをしたような気持ちになったことを覚えている。年金の加入手続はスムーズに出来たが、保険料を支払っていくのは大変な作業だ。特に学生時代は、お金がない中で、当時の月額年金保険料の 11,000 円～12,000 円を捻出するのに苦労した。これらの年金保険料は大きな出費であり、収入が家

からの仕送りとバイト代を合わせてもそんなにいかない金額の中で、年金支払の原資を捻出するために、遊興費や食費を切り詰めないといけないことが本当に辛かった。何度も支払いを辞めよう、支払いを親にお願いしようと思った。でも、祖父母から「年金は自分で支払うことが大事だ」と言われたことを思い出しては踏みとどまり、そして節約に励んだ。例えば、外食を止めて自炊を覚えたり、どこに行くのも自転車でいていたこと等で頑張っていたことは今になればよい思い出である。それから約 27 年が経過した。私も学生からサラリーマン、そして自営業者と環境が変わってきたが、祖父母からの教えを守り、年金の被保険者期間の空白はないようにしようと心がけてきた。

大好きだった祖父母も亡くなり、母も年金を受給する年齢になった。私が小さい頃に祖父母からもらっていたお小遣いを、私の子供にこっそりと渡しているようである。歴史は繰り返していくのだなと思う。

誕生日の前後に年に 1 回、ねんきん定期便が葉書で送付されてくる。その葉書を開くのが私の密やかな楽しみである。その葉書で私がこの 1 年間で支払った年金保険料の支払、そして年金の受給額が徐々に増えていることを確認して、自分の今後のライフプランを検討している。今後もきちんと保険料の支払いをしながら、それに年金を増やしていきたい。もちろん支払った年金をたくさんもらうためには少しでも長生きもしないといけない。健康づくりと年金づくり、これが私の今後のテーマだ。そして、私も祖父母からの教えとお小遣いを子や孫に引き継いでいきたい。